

# 宮入慶之助記念館だより

第 18 号

(ミヤイリガイ発見 100 周年記念号)

特定非営利活動法人宮入慶之助記念館 2013 (平成 25) 年 4 月 30 日発行

巻頭言 ミヤイリガイ発見から一世紀

名誉館長 多田 功

宮入教授と鈴木講師の二人が九州で住血吸虫感染経路を明らかにして今年が 100 年目になります。これを記念して 3 月末に東京医科歯科大学で開かれた第 82 回日本寄生虫学会大会 (太田会長) では記念シンポジウムや市民講座でその功績を検証し広く伝える講演が持たれ、日本オリジナルな研究成果が多く聴衆に感銘を与えました。

ほぼ 1 世紀以前の日本で、病原体である日本住血吸虫の発見、その感染経路の発見 (ミヤイリガイの役割)、殺貝剤 (生石灰) の散布、診断と治療の工夫などが矢継ぎ早に開始されたことは誠に特筆すべきことです。そしてその後、田畔コンクリート溝渠化など本格的な防圧につながったのです。歴史的に見て日本国はその気候風土と農業様式などの特徴から多くの寄生虫病が蔓延していました。フィラリア症、マラリア、腸管寄生虫 (回虫、鉤虫など) 症などがそれです。日本人はこれらの疫病を根絶する努力を続け、遂にそれを成功させました。その成果をもとに 1997 年当時の橋本首相が G8 サミットで提唱し、日本が主導して世界中の寄生虫防圧を始めようとしたのが「橋本イニシアチブ」です。この理念は国

際的に歓迎され世界保健機関 WHO の国際保健活動を大いに力づけたものです。

住血吸虫症は現在でも世界中に 2 億人の感染者がいます。国際保健協力という観点から日本は太平洋戦争後、住血吸虫の研究と防圧を海外各地で展開してきました。フィリピンには熱帯病研究所を建設し、JICA は田中、安羅岡先生ら多くの専門家を流行地に派遣しました。レイテ島では林先生が独自に「700 円募金キャンペーン」により治療面で大きな貢献をしておられます。さらに長崎大学熱帯医学研究所はケニアの大流行地に研究拠点を設け、今も地道な研究と防圧を続けています。しかし感染経路や中間宿主カイが明らかにされ、特効薬があるにもかかわらず世界的に見れば感染はスムーズには減っていません。同じ病気の歴史的経験を持つ日本として、今後も地球レベルでの住血吸虫対策を支援し続けたいものです。それは単に見知らぬ国のためというのではなく、私たち自身の問題として重要であることを先のアルジェリアでのテロ事件が教えてくれました。日本は孤立しては立ち行けないのです。

中間宿主発見 100 年を迎えて考える

市立甲府病院神経内科元科長 林 正高

世界に広く分布する 4 種類の住血吸虫症の中で日本住血吸虫 (日虫) 症は症状が最も重く、肝臓、脳等に重篤な障害を起し、死に至らせます。この日虫症は中国、比国、日本を中心に紀元前から有病地の住民を苦しめていました。病因不明のまま、一村の住民が消滅していた (中国) とか、小学校に入学した生徒の 1/3 が日虫症で死亡、病欠で卒業出来ない (比国) とか、有病地に嫁に行くなら棺桶や経帷子を背負ってゆけ、と里謡に伝えられた (甲府地方) とか、日

虫症は長年の間、有病地住民にとり死の恐怖の病でした。

この奇病は 1847 年、藤井好直により「片山記」で病状が明らかにされ、1904 年、桂田富士郎により奇病は日虫の感染により発症する事が発見され、初めて日虫症と命名されました。1913 年、宮入慶之助らが日虫生活史の中間宿主である宮入貝を発見し、日虫症の感染状況が明らかになりました。1923 年、西業求が日虫症の治療薬のスチブナールを発見しました。斯様に紀元前から

原因不明の死の恐怖の疾患・日虫症に対して日本人は病状詳記、病因・宮入貝発見、治療に至るまでを世界で先導していました。これ等、日本人の業績により、その後、世界で他の3種類の住血吸虫症が発見され、現在、世界に2億人以上の患者がおります。しかし、1996年、世界で初の住血吸虫症の流行終息宣言が日本国内で最大の有病地・山梨県から発せられ、日本からは日虫症の新鮮患者はいなくなりました。この快挙は日虫の中間宿主である宮入貝撲滅のため田畑への殺貝剤の散布、1956年から24年間に莫大な国家予算を使い、宮入貝の棲息を排除するためのコンクリート水路を有病地に網の目の様に造成し、住民の弛まぬ殺貝運動の遂行で成し遂げた成果であります。

日虫症の病状を紹介します。代表的には肝臓と脳の病状の2型があります。何れもヒトの皮膚から体内に入った日虫幼虫が静脈血に入り、全身を巡り、成虫となり肝臓に近い門脈で約3年間棲息し、雌雄一対の成虫が日に500~3000個の排卵をします。その成虫が数~10数匹も寄宿しているため多数の虫卵が肝臓や脳内の血管に詰り、血管や周囲の組織に炎症を起こします。腹部症状としては肝臓や脾臓が腫れ(肝脾腫型)、腹水、栄養失調、衰弱、細菌等による感染症を合併して、比国では3年以内に75%の患者が死亡します。日本や中国では6~10年後には肝硬変や肝癌になり、死に至ります。一方、脳の血管に虫卵が詰ると脳梗塞様の症状を起こし(脳症型)、20~30%の患者は失語症、片麻痺、半盲を認め、更に全例にけいれん発作を起こし、日に数回、多い

人は日に34~35回も起こし、死亡します。他には脳炎様の症状を示し、頭痛、意識障害、けいれんを起こし、死に至ります。治療として、日虫に感染した急性期に、あるいは、肝、脳の2病型を示しても2~3ヶ月位のうちであれば1978年に西独で開発された特効薬・プラジカンテルを一日に2回だけの服用で症状は軽快、改善します。しかし、日本以外の有病地では宮入貝が撲滅されておらず、治療後に病状が軽快、完治しても再感染を起こすこととなります。初感染時の症状よりも再感染時の症状はより激烈であります。

日本には日虫症の新鮮患者は一人もおりませんが、20~30年前に日虫に感染し、非有病地に転居し、無症状で過ごしていたものの、腸や肝臓の疾患で手術等により摘出された組織に日虫卵が見つかり、日虫症を知らぬ医師、患者は今後の対応に苦慮し、今でも年に1~2件の相談があります。日虫感染の影響は安全宣言が出た日本においても決して過去の疾患ではないと、この種の状況に接する度に思います。

現在、世界には住血吸虫症の新鮮患者は2億人以上おり、効果のある治療薬を服用しても再感染をするという大きな問題点があります。住血吸虫症を撲滅するためには日本で成功したように有病地から宮入貝を撲滅するとか、現在、研究が進んでいる住血吸虫ワクチンを有病地住民に接種するとかの方法が考えられます。日本は寄生虫疾患に関して超先進医療国です。多くの住血吸虫有病地の住民に思いを馳せねばならないと思います。

---

## カイ発見から100年、その現状と今後を考える

館長 宮入源太郎

---

記念館を開館して13年、その間に多くの専門家の方々に教えていただき、見聞した知識による門外漢の発言であります。100周年にあたっての思いを述べさせていただきます。

### 1. この100年のあゆみ

この100年のあゆみを概観すると、1913(大正2)年に日本住血吸虫(日住虫)の中間宿主に関する論文が発表され、これ

に基づき1918(大正7)年に広島県に地方病撲滅組合が結成されるなど各地でカイ撲滅対策が組織的に開始されました。1931(昭和6)年には国による寄生虫予防法が制定されその後の対策が推進されました。1941(昭和16)年に太平洋戦争が始まり対策が停滞し患者が増えた時期もありましたが、終戦後は日住虫対策10年計画の策定や学校保健法での取り組みなど住民、行政、研究者が

一体となって対策事業をすすめた結果次第に患者が減っていきました。その結果、1990(平成 2)年に筑後川流域宮入貝撲滅対策連絡協議会が安全宣言をし、1991(平成 3)年に広島県環境保健部が流行終息報告書をまとめ、1996(平成 8)年に山梨県知事が流行終息宣言を出しました。そして、2013(平成 25)年 3 月には日本寄生虫学会はカイ発見 100 周年記念シンポジウム、企画展示及び市民公開講座を開催しました。

## 2. 100 年後の現状

(1) 各地で安全宣言が発せられた日本では、新規患者の発生はゼロとなりミヤイリガイは甲府盆地の一部で生息が確認されている以外は絶滅されたといわれています。

しかし、各地の対策協議会が解散された以降はその生息を組織的に検証または監視が継続されているという話を聞いたことがありません。

(2) 視点を地球上にかえると、世界では約 2 億人の患者がいると、この 3 月の日本寄生虫学会大会でも言及されています。世界各地で患者ゼロを目指して懸命の努力が続けられています。

(3) 多くの日本の住血吸虫病関係の研究者が海外で活動を続けられています。現地の環境は日本の場合と大きく違い、現地の住血吸虫病制圧のために苦しいたたかいが続けられています。

(4) かつての有病地にあった対策協議会はすべて解散され、各県の衛生公害研究所の日住虫病関係の部門は無くなり、行政組織の中にも関連部門は見当たらなくなりました。

(5) 各地の病院や医院で日住虫症の診断・治療ができる場所は、私の知る限りでは甲府市立病院しかありません。しかも、ここでも現役の医師はいません。

記念館に診断・治療機関の問い合わせが来たことがあります。

(6) この 3 年間ばかりの間、記念館の会員が甲府盆地、北九州地方、広島県片山地方などの日住虫病制圧のたたかいを偲ぶことのできる遺跡・遺構を調査しましたが、多くは現状のまま放置され、清掃や手入れが行き届いたものは少なく、その由来などを

説明できる状態にあるものは少ないことが感じられました。

## 3. 今後について思うこと

日本では、世界に先駆けてこの病気の制圧に成功したと言っても、世界各地では多くの患者が苦しんでいます。中国でも 1955 年から政府による本格的な努力が開始され、劇的に患者を減らすことに成功していますが、ゼロにするまでにはまだまだ時間がかかる状況にあると理解しています。

現在でも日本の研究者達の懸命な研究が続けられています。その視点は医学的生物学の観点での研究が主体であると思います。しかし、もっと世界各地の制圧がすすむための方策は無いもののでしょうか。物理学的観点から、カイやセルカリヤを殺傷または活動を忌避させることはできないもののでしょうか。電磁界振動(たとえば電波)がカイやセルカリヤに及ぼす影響を調べたらどうでしょうか。放射線をうまく活用できないのでしょうか。昔の人の生活の知恵に何かヒントは無いもののでしょうか。蚊帳、蠅とり紙、誘蛾灯、ネズミ捕りなどの事例をヒントに、完全駆除でなくても局所的に住民の安全地帯ができれば制圧のための一助になるのではないのでしょうか。

また、人体内に蓄積された虫卵はその後も残されたままになると理解していますが、現在の高度な外科手術の進歩により人体に残された虫卵を除去することに成功すれば、患者の苦しみを軽減することが出来るのではないのでしょうか。

広大な地球上に生きるカイにからむ自然界と人間との共生を考えたとき、カイについての不断の関心と観察が必要だと思います。田畑に生息するミヤイリガイを観察し採取することは簡単ではなく、一定の経験と熟練を必要とします。そのためには、観察会・採集ツアーや講習会・技能認定なども必要ではないのでしょうか。

医療分野でも、住血吸虫の鑑定、便の中の虫卵の検出技術など診断技術の継続的な保全・維持の体制が必要だと思います。

診断や治療は海外からの派遣医師に頼る時代が来るのでしょうか。

最終回は、慶之助臨終の地(昭和 21 年 4 月 6 日没)西新町(現町名 西新 3 丁目 12)です。

古小烏町の住居を売却し、一時長野市に疎開していた慶之助は太平洋戦争の終戦を機に福岡にもどり 81 歳で亡くなるまで九州大学の同窓生である真島氏の西新町の邸宅に間借りして暮しました。ここでは慶之助夫婦、私の両親、私と妹の合計 6 人が生活していました。彼の死後も私達一家は私の小学校低学年ごろまで住んでいたの、当時の様子がすこしばかりは記憶に残っています。

真島邸は、家人は木戸口から出入りし日常はあまり開閉しない立派で大きな観音扉の木造の門や和式で格子造りの大きな引き戸の玄関があり、屋根は鬼瓦をはじめ銅と瓦で葺いてあり銅御殿(あかがねごてん)などと称された堂々たる純和風住宅だったことを覚えています。私達が訪れたときは、既に別の人に売却され、コンクリート造り 2 階建ての立派な洋風邸宅に変わっていました。敷地は昔と変わらず相当広く、かつて日本間に面した中庭に築山などがあった場所は芝を植えた庭園になっていましたが、

広い庭の佇まいは残っていました。近隣とくらべても広く閑静な邸宅であったことが偲ばれます。残念ながらお世話になった真島家の消息はわかりません。真島邸の近くには、慶之助の愛弟子でクリスチャンだった大平得三先生が昭和 30 年代に校長を務められた西南学院高等学校の旧チャペルがありました。その前の蘇鉄が植えてある校門近くの中庭で、戦後間もない頃近所の友人とよく遊んだことを懐かしく思い出しました。足早でしたが館長とともに 3 箇所を探訪し往時を偲びながら、記念館の今後のことに思いを馳せた旅でした。

前号に引続き、高橋操三郎著「私の九大時代の諸教授に思う」17. 宮入慶之助教授の部をご紹介します。(以下、原文のまま)

先生は能文家であった。

私が始めて論文を書き、先生の校閲を願った際のことである。先生は言われる。僕は、これまで、相当かいたが、長い文は書けない。それは、内容よりも、文に重きをおいたからだ。君、名文とはどんなものか、知っているか。名文とは、達意を旨とすることは、言うまでもないが、更に

(イ) 一字一句と雖も、付け加えることの出来ないこと。

(ロ) 一字一句と雖も、除くことの出来ないこと。

(ハ) 一字一句と雖も、順序を代えることの出来ないこと。

この三つの要件を備えたものでなければならぬ。

われわれの書く論文は原稿料稼ぎでもなく、又面白い世俗的読物でもないのだから、読者の倦怠をも考慮して、出来得るかぎり、短く、簡潔に書くべきだ。「一句一句にして成り、一行月を閲して未だ全からず」というが、僕の長い文の書けない理由は、ここにあるよと。

先生の言葉のよう書ければ、それは、己に散文ではなく韻文となろう。名文と言われる名文は、吟味すれば、確かに、先生の言葉のように出来ている。

先生は又、能弁家であった。

演説について嘗て話されたことがある。「君もいづれ、見台を叩くようになろうが、それに一番必要なのは態度だ。ある人が、

能弁家—その人の名を私失念—に演説の要件を尋ねた所、その雄弁家の言うのに、要件の第一は態度だと答え、第二はと尋ねたら、第二も態度だと答え、更に第三はと尋ねたら、第三も態度だと答えた」と。ゲーテが演壇に立つや、先ず若い婦人から襟を

正し始めた。これも、その際の先生の言葉として、深く脳裏に印せられている。

先生は又、能書家であった。  
(以下次号に続く)

### (来館者よりの寄稿) 宮入先生と父：高橋操三郎

高橋 孝雄

縁とは不思議なものと、常々感じております。

父：高橋操三郎が他界し早 42 年、2012 年の春先に娘が「インターネットで“高橋操三郎”を検索したら“ミヤイリガイ”の研究にヒットしたけど何か知ってる？」と聞いてきました。ミヤイリ・・・その名に“私が小さい頃、父がよく話をしていた宮入先生のことではないか”と、すぐに思い当たりました。

父は家庭で仕事の話をするのは殆どありませんでしたが、宮入先生については師であるだけでなく、そのお人柄を深く尊敬し、父親のように慕い、また愛弟子としてとても目にかけていただいていたとよく聞かされました。詳しい内容や事例迄は把握していませんが、貴館に寄贈した論文別刷等を読むだけでも、父の想いや宮入先生との関係が垣間みえたように思います。

その頃、久しぶりに家族で私の祖父(高山正雄.九州帝国大学総長:法医学博士)の生家のある塩尻へ旅行を計画しており、是非一度、父の恩師:宮入先生ゆかりの記念館をも訪問したいと考え、事前に館長の宮入源太郎様にご連絡を差し上げ、訪問した次第です。

私が館長の歓待を受け話をしている間、子供たちは館内を見学しながら「お爺様だ!」と父と宮入先生の写真をみつけ、よく見ると場所が私の故郷:山口県“秋芳洞”でのものでした。撮影場所やその写真を宮入先生が大切に保管くださっていたことがとても感慨深く、父にこのことを伝えたら如何程に嬉しく思うだろうと感じました。また、第 17 号ではそのことを掲載していただき、とても感謝しております。有難うございました。

### 箱崎の高灯籠灯台

川野和樹 (会員)

記念誌「住血吸虫と宮人慶之助」の最初の表題に、宮人菊次郎(慶之助先生の甥)さんのスケッチがあります。



これは慶之助先生が九大を退官された翌年の大正 15 年に、九州旅行でこの地を訪れた菊次郎さんが描かれたそうです。

この風景がどこかお分かりでしょうか。端書きに「箱崎ニテ」とあるスケッチの灯籠は、今でも箱崎宮参道の鳥居の横に建つ「高灯籠」です。(写真下)



この高さ 6 メートル程の石積みの高灯籠は、今から 200 年程昔の江戸後期の文化

14年(1817年)、箱崎浜の漁師が帰船の目印のため灯台として築造したもので、住民が当番制で火を入れ、当時灯籠の足元まで海岸だったこともあって、遠くの船から明かりがよく見えたとのこと。(福岡市東区役所HP)。

そのスケッチから87年経った現在の風景は、のどかな海岸の面影は微塵もなく、目の前を1日6万台の車が行き交う国道3号線と、200mも先へ伸びた海岸線をさえぎる街並みにすっかり埋もれています。

はるか昔、人を導くという灯台の役目は

終わってますが、管崎宮参道の入口に建つこともあって、博多祇園山笠の「お潮井取り」や、秋の大祭「放生会」を見守り、行き交う博多の時代の流れを見守っています。

慶之助先生が残された偉業と功績は、混沌として先が見えないどんな時代にあっても、新たな道を導く灯台であって欲しいと、私にはそんなメッセージを感じる菊次郎さんのスケッチです。(写真はスケッチの海側から撮っています)

---

## ホームページ訪問者との交信より

---

千葉県・木更津市の小櫃川(オビツガワ)沿いには、ミヤイリガイが生息している地域があることが知られていますが、当記念館ホームページへの訪問者との交信のなかで、次のようなお便りがありました。

——— 私は、67歳の主婦です。宮入慶之助記念館のホームページを興味深く拝見いたしました。私は就職して家を離れるまで千葉県・木更津市高柳地区の小櫃川沿いで育ちました。通った岩根小学校は小櫃川から大分離れていましたが、岩根中学校は小櫃川のすぐ近くでした。小さいときは、友達と小櫃川で遊びました。広い砂洲でのおままごとや、シジミ採り、水遊び、魚とり、夏には水浴びなどもしたりしたことが懐かしく思い出されます。ところが、私たちが住んでいた高柳地区や通学した岩根中学校沿いの小櫃川に、ミヤイリガイが生息していたとは！本当に驚きました。

「日本住血吸虫」、「ミヤイリガイ」という言葉は、用語として聞いたことはありますが、そんなに身近にあったなんて、考えてもいませんでした。

そして、十数年前に故郷でおこなわれた中学校の同窓会の際、「日本住血吸虫にやられて大変だったんだ。」と打ち明けてくれたクラスメートのS J君のことを思い出しました。早速連絡をとって聞かせてもらった内容は次のようでした。(公表する了解は本人から得てあります。)

「33歳の頃だったと思う。だから昭和54年(1979年)頃かな？」

当時マラソンに熱中していたんだけど、疲れやすくてしょうがなく、懇意にしていた君津市のS医院で受診したら、『非常に珍しい病気だ』と驚かれ、すぐに千葉大学医学部附属病院に紹介され入院。その結果『日本住血吸虫症』と診断された。『肝臓が線維化して虫食い状態だ。』と言われた。小さい時から裸足で小櫃川や用水路や田んぼに入っていたせいかもしれない。附属病院では2ヵ月間入院して検査や質問をされてから、定期的に3年ほど通院して『もう大丈夫だから近くのお医者にかかりなさい。』と言われたがそのまま今にいたっている。近所の友人の中には僕と同じ病気で君津中央病院にかかっていた者もいる。それから間もないころ、『小櫃川にミヤイリガイが棲息している。ミヤイリガイは日本住血吸虫症の媒介をする。』ということが新聞に掲載されて、『ああ、これだったのか。』とわかったが、その切り抜きを失くしてしまった。新聞を見たときすぐに用水路に行ってみたら、確かにミヤイリガイがいた。今もいるようだ。」

貴記念館にとっては参考になる体験と思いお知らせします。———

---

## 記念館活動記録

---

- 平成 24 年 11 月 22 日 石井 明、川野登、澁川眞喜男、岩永 襄各会員と館長 5 名が広島県片山地方の日本住血吸虫病関係の遺構の調査のため福山市神辺支所を訪問し保存されている片山病対策事業関係の資料を閲覧させていただき、その後吉田竜蔵碑・藤浪 鑑碑などを見学しました。対策事業予算書、工事写真、陳情書、薬剤散布作業の写真などが保存されていました。神辺支所神辺保健福祉課の渡辺課長以下関係の方々にお世話になりました。
- 平成 25 年 1 月 11 日 多田 功会員(名誉館長)と館長が九州大学医学図書館の井上館長を表敬訪問するとともに、11 月に開催予定のミヤイリガイ発見 100 周年記念企画展についての打合せをしました。
- 1 月 24 日 館長ほか 1 名が福山市神辺支所を訪問、11 月に閲覧させていただいた資料の一部を複写させていただきました。
- 1 月 25 日 館長ほか 1 名が岡山大学医学部構内の「桂田資料室」を見学、その後同窓会鶴翔会事務局にて故鈴木稔教授関係の資料を閲覧、一部写真を複写させていただきました。妹尾事務局長にお世話になりました。
- 3 月 29 日より 31 日まで東京医科歯科大学湯島キャンパスで第 82 回日本寄生虫学会大会が開催され、今回の大会ではミヤイリガイ発見百周年記念として大会期間中に特別企画展示「やさしく学ぶ住血吸虫」と最終日の午後の市民公開講座「住血吸虫病との闘いー宮入慶之助に学ぶー」が国立科学博物館、目黒寄生虫館、宮入慶之助記念館などの共催で開催されました。当記念館は所蔵品から写真・関連書籍・展示品の一部などを貸し出しし、展示区画の一隅で当館の紹介パネルを掲示しパンフレットの配布をさせていただきました。このイベントは学会はじめ共催各団体のご努力により予想以上に盛況で、特に市民公開講座では 160 名以上の参加者があり、記念グッズ(T シャツとストラップ)のうち T シャツは連日完売だったとのこと。

写真 1

写真 2

(特別企画展示会場)

(市民公開講座会場)

---

### カイ発見 100 周年記念グッズの発売

---

ミヤイリガイ発見 100 周年を記念して目黒寄生虫館と共同で記念グッズを発売いたします。

詳細は次号にてお知らせしますが、記念表示と日本寄生虫学会、目黒寄生虫館、宮

入慶之助記念館の各ロゴマーク入り T シャツを 1,680 円で、記念表示とミヤイリガイ標本を封入したストラップを 1,050 円で販売します。

---

---

**会員入会者** (次の方が会員に入会されました。敬称略)

---

---

柳澤 紘

---

---

**賛助会員入会者** (次の方が賛助会員に入会されました。順不同、敬称略)

---

---

村川 孝勝、丸山 安昭

---

---

**ご支援へのお礼** (順不同、敬称略)

---

---

次の方々からご支援をいただきました。厚くお礼申し上げます。

**寄 金** 武井 武彦、市川 實、小森 研一郎、宮入百合子、三浦 良忠、  
島田 満幸、村山 定男、北川 正之

**寄 贈** 菊池 良治、片渕 陽一 **記念館周辺美化** 宮入 昭夫

**イベント写真記録** 武井 武彦 **ビデオ記録** 下平 浩

---

---

**新規会員募集**

---

---

私たちは、宮入慶之助の業績を後世に伝えると共に、ミヤイリガイを駆除し日本国内を日本住血吸虫症から安全な状態に導いた先人の努力の歴史を末永く伝えることを目標に、記念館の維持・運営、資料の保存・展示・説明・調査・収集、機関紙の発行、展示会・講演会の開催などの活動をしています。

このような活動に参加またはご支援いただける会員を募集しています。

会員種別は以下の通りです。

**正会員** 当館の活動に参加またはご支援いただける方 年会費 3,000 円

**賛助会員** 当館の活動に財政的にご支援いただける方 年間 3,000 円以上のご支援

ご希望の方は、電話・手紙・FAX・Eメール (アドレス gmiyairi@triton.ocn.ne.jp) いずれかの方法で事務局までご連絡ください。入会申込書と振り込み用紙をお送りします。

---

---

**編集後記**

---

---

○今号はカイ発見 100 周年記念号として、長年にわたり日本住血吸虫症の治療の第一線で患者に接してこられ、現在もご活躍中の林 正高先生に筆頭記事を執筆いただきました。

○第 82 回日本寄生虫学会大会が、3 月 29 日から 31 日まで、東京医科歯科大学で開催されました。大会の企画の中でカイ発見 100 周年記念を取り上げて下さり、国立科学博物館や目黒寄生虫館が共催に加わって大会を盛り上げることができたことは大変ありがたいことでした。初代館長一家が収集・保存した資料に加えて多くの支援者の方々から寄贈いただいた資料がこの大会でお役にたち、記念館を開館して良かったとうれしく思いました。

○大会が無事終わりましたが、美酒に酔う暇は無く、法人としての決算・総会と平成 25 年度最初の記念事業である 5 月 15 日か

ら始まる国立科学博物館の企画展「日本はこうして日本住血吸虫症を克服した」のお手伝いを進めます。引き続き皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

宮入慶之助記念館だより 第 18 号

(ミヤイリガイ発見 100 周年記念号)

発行者

特定非営利活動法人宮入慶之助記念館

編集者 宮入源太郎

〒388-8018 長野市篠ノ井西寺尾 2322

Tel&Fax (事務局)026(293)3828

(記念館)026(293)4028

ホームページアドレス <http://www5.ocn.ne.jp/~miyairi/>

発行日 2013(平成 25)年 4 月 30 日